

第22回 A地区仮設住宅訪問記録 平成24年2月7日(火)

参加者:6名+M生活支援アドバイザー・児相T相談員+学生3名+松下



今年の冬は日本各地で豪雪が報じられており、千葉県でも例年になく寒い日が続いていたが、今日は寒さも緩み、比較的温かな雨の日である。

森は相変わらず、11日の大学主催の「空とぶクジラ絵本コンテスト」授賞式の準備のため参加できず、松下と4年次生2名、大学院生1名で担当することにした。

メニューについても、森が不参加となったため急遽、「ちょい編み襟巻き」を松下が担当することになり、出発前に5分ほど森から手ほどきを受けての出発となった。A地区仮設住宅の参加者はいつも比較的年齢の高い方が多いので、場合によってはメニュー変更も考え、数種類の材料を車に積み込んだ。

A地区仮設住宅の駐車場に入ると、前回初参加のEさんが集会所の方に向かって歩いている。集会所横の駐車スペースに車を止め、毛糸などの材料を集会所に運ぶと、先ほどのEさんと常連参加のTさんが生活支援アドバイザーに何やら申し込みをしている。C特別支援学校から、先着で生徒が工作した布団干しと整理棚のどちらか希望の1品をプレゼントしてくれるのだそうである。「有難いねえ」と二人は布団干しを申し込んでいた。確かに仮設住宅には布団を干せる設備はない。この布団干しが届いたなら、陽光いっぱい浴びたお布団に包まれて、きっと安らかな眠りが得られるに違いない。

そこへ、娘さんが隣に越してきたというIさんがやって来たので、Tさんの孫のK君、T相談員、M生活支援アドバイザーも加わって始めることにした。メニューを相談すると、「編みものじゃなかったの」とTさんが言う。「そうでしたね」と松下は少し心配しながらも、森の夫と息子さんが編んだという“ちょい編み襟巻き”のサンプルを取り出した。

「いいねえ、道具がいらないのいいよ。やろうやろう。」と、盛り上がる。それぞれ、色を決め、学生や生活支援アドバイザーの援助で、編み針を使わず自分の指のみで編み始める。手の

ひら側を見ながら編み進めるが、反対の手の甲側には編み高が見えるため、大いに達成感が増すものだ。そこへ、年末に新居が完成して引越しをしたIさんとパッチワークの袋づくりに参加したIさんがやってきて合流し、一層にぎやかになった。

K君は院生のY君がお世話係を担当していたが、途中から編み物そっちのけで、久しぶりに気の合うお兄さんに会ったとばかり大はしゃぎして、時折Tさんに注意されている。今日は雨で外遊びはできないが、お天気が良ければ思い切りT君とキャッチボールでも付き合うことが、心の癒しになるのかもしれないと感じた。

そうこうしているうちに、「先生、編み終わりはどうするの」という声上がる。毛糸の長さに余裕のあるものはポンポンを作って編みつけ、長さに余裕のない糸はリボン結びにするなど工夫して、それぞれの襟巻きを完成させた。早速、襟に巻いて記念写真を一枚。

今日は、比較的早く完成したので、持参したおせんべいと松下手製の切干風大根炒めで茶話会にすることにした。「あらっ、これ、いい味が出てるじゃない。何が入っているの?」とIさんが尋ねる。「大根と人参を千切りして炒め、そこへ1缶分のツナを入れました。」と松下が答えると、参加者が口々に「簡単で、しかもいい味が出ているから、今度、家でもやってみるわ」と言いながら、箸が進む。そのうち一人が、「4時からテレビで見たい番組があるので」と帰って行く。外の雨は一段と激しくなり、それぞれ自分の編んだ「ちょい編み襟巻き」を首に巻いて帰って行った。

新居が完成して年末に引っ越して行ったIさんは、荷物は無いものの仮設住宅はそのまま借りてあり、毎日1回は立ち寄っているという。何故だろうとその理由を考えてみた。

1. 6ヶ月にわたる仮設住宅の生活で親しい友人ができ、その友人に会いに来る。
2. 戸建てに移ると仮設住宅ほど情報が届かないので、情報を求めて立ち寄る。
3. 仮設住宅にはボランティアや物資などの支援が集まる。

直接、Iさんに確かめることはしなかったが、こうして考えてみると、被災当初から親戚などに身を寄せた方や自力で賃貸住宅などを借りて移り住んだ被災者に十分な情報や十分な支援は届いていたのだろうかとの疑問になる。また、Iさんのように何とか自力で家を建てて移り住んだとしても、それですべて一件落着という訳ではないであろう。かえって、狭い仮設住宅にいた方が心が満たされている人もいるかもしれない。

間もなく大震災から1年を迎えようとする今、行政は改めてしっかりと被災状況を把握し、個別的に、トータルに、そして継続的な支援を見直すべき時ではないだろうか。

後始末を終えてI地区仮設住宅に向った。小雨降る中、次回のチラシを学生と4人で手分けして、一戸ずつポスティングして廻った。ネット裏の単身高齢者エリアではNさんに声をかけ、今月23日のいわき市仮設住宅にボランティアに行く意思確認を行う。Nさんは、Mさん・Yさんにも「皆で行こうね」と声をかけ、いつも、まとめ役を担って下さる。次週は、打合せを兼ねて創作活動を行う予定である。

「被災者が別の被災地にボランティアに行く」という夢みたいなのが現実化して行くことに、ワクワクする一日の終わりであった。